



コロナ禍におけるクラブの運営について

発表者：岐阜中ロータリークラブ
会長 三宅 裕樹

新型コロナウイルス感染が収束しない状況に於いて、どのようにクラブ運営を行うのか？世界中の数多組織のリーダーが頭を抱えている課題ですので、恐らく結論は無いのでしょうか。

戦後 75 年ほどの歴史の中で、「伝染病」で人間の行動が制約されるといった事態は初めてです。効果的な予防法や治療薬が無い状態では、ひたすら感染を避ける行動を取り続ける以外に方法はありません。大幅に行動が制約される中で、ロータリークラブの活動を継続しようと思うには、「メンバーである事の価値」が、活動する事によって生じるリスクを上回らねばいけません。コロナ禍といった危機的な状況下ではロータリークラブはメンバーより「選択されるのか否か」という冷酷な審判を受ける立場にあると言えます。

また、メンバーの置かれた状況も深刻です。コロナ禍によって事業が大きく影響を受けている場合から、影響は軽微という場合まで多岐に渡ります。前者の場合は、経営者として事業に全力を傾注する事が最優先です。ロータリークラブが「奉仕」の団体であって「職業奉仕」に重きを置くならば、この非常時に於いては活動を休止し、全てのメンバーが「職業奉仕」に専念するといった選択肢も充分考えられます。